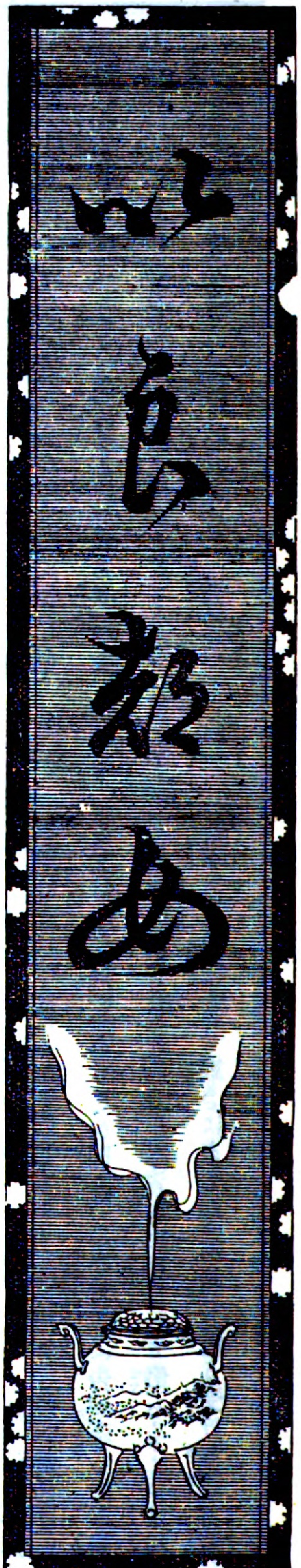


いらつめ第廿九號目次（明治二十二年十一月三十日）

●樂　曲　譜……新曲落葉ぼるか……毛布野女史
●小　　說……心づくし第一回
●家　　政……國の心得（承前）
裁縫獨學び（初等第二）＝四身襦袢裁縫法……木下貞子
裁縫獨學び（高等第二）＝綿入れ羽織りい裁縫法＝女小袖裁縫法及び絎け方＝揺い巻き裁縫法＝片面染めの物で三身羽織りを裁つ法……木下貞子
改良實地衛生料理法（其一）＝食物調理法心得……岩間芳松
●文藝美術……内閣官報局新定送假名法（承前）
懸賞文藝うつり香文章二篇
●寄　　書……料理の目的……小雨漁史
●小　　說……繡鴛鴦第七回……麴亭飯人
●雜　　纂……最上髮油ぽめエたむ　でぱいん製法
諸物數へ方（承前）
國語故事づくし（其二）＝い及びへの部
婦人雜誌一樣の改正
●小　　說……松の下露其一滴下……美妙齋主人
●通信問答……府下屈指の畫工＝砥石の事＝沃度ぽッたアす＝枯れた竹に模樣を付ける法＝生竹に模樣を付ける法＝小兒急病療法＝硝子板についた樹脂をおとす＝西洋襟幷びに「かふす」洗濯法＝水浴と腦病患者＝水浴に關する一切の事＝和文獨習書＝佛蘭西白墨と和製白墨＝「鵲の渡せる橋」の意味＝音樂書＝油と精＝ハンドコロン＝西洋襟蠟引き法＝ツバカスを去る新良法＝達者な身體で髮が脱ける＝脚氣に牛乳と玉子＝味噌醬油漬物衛生上の價値＝添削規則＝好い英詩＝近頃の婦人書物の名＝齒莖の膿むのを治す法＝わるい齒磨＝鐵漿と齒に洗ひ髮に油を付ける可否＝外に疑問六題

社告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵税共金三錢、十二部金二十九錢郵税共金三十五錢、二十四部金五十七錢郵税共金六十九錢、三十六部金八十四錢郵税共金一圓〇二錢、四十八部金一圓郵税共金一圓二十四錢●別製一部金三錢五厘郵税共金四錢、二十部金六十五錢郵税共七十五錢、五十部金一圓六十五錢郵税共金一圓九十錢●並別兩製共前金領收の上で無くては差上げぬ事●府内に限り無郵税●毎月四回（八日十五日二十二日三十日）發兌●金子御差し送りの手續きは郵便小爲替なれば拂渡郵便局さある處に（神田郵便局）と記し、受取人欄内に（神田平永町九番地成美社）と御記入の事●郵券代用は郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割り増しなれば妨げ無い事●見本は五厘切手で並製三錢別製四錢領收の上差上げます●廣告料一行金八錢、割引無し●第廿八號から本社から賣り出す證として雜誌の表紙に成美社の捺印を加へましたから是を目標として御求めを願ひます。捺印の無い雜誌に就いては本社で一切責に任じません。捺印の無いのを御求めに爲っても代金御支拂に及びません。

從第二十八號至第三十七號十部版權所有

新案別製本出版の社告　度々の御注文により第二十六號からいらつめ別製本を作り、永く保存よ堪へるやうにしました。（一）別製本は美麗堅牢な紙に本文を印刷する事（二）別製は容易に再板をせぬ事ゆゑ御注文は至急で無ければ賣れ切れにあります（三）別製並製共記事は相同じです（四）定價は前にあります（五）第二十六號第二十七號及び第二十八號の別製本は悉皆賣れ切れになりました。

いらつめ合本の社告　西洋諸國の婦人雜誌では大抵一仙か一ペンニの月三回以上發兌でそれを一ケ月の後になり、一ケ月分だけ合本し、表紙を付けて賣り出します。いらつめでも是に倣ひ、來る十一月が過ぐれば更に十一月分だけを合本し、美麗な表紙を付けて賣り出します。定價金十錢五厘郵税共金十二錢、紙數八十四ページ、總目錄付き。府內無郵税。

全國各地方のいらつめ愛讀者中代金延滯の分は來月十日迄に御支拂ひ無い上は據無く紙上に尊名を掲げます。　成美社會計掛　白

明治二十二年十月二十九日　印刷
明治二十二年十月三十日　出版
發行人　東京市神田區平永町九番地居住　山田武太郎
印刷人　同市同區同町同番地成美社方寄留　佐野忠吉
發行所　東京市神田區平永町九番地　成美社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第二十九號

小説

第一回下

毛布野女史

餘りの意外に呆れ果て兎角の思案も出ざりしか、何には兎もあれ様子を問はんと但見れば早くも其人は何地往きけん影もなし。　若し彼の人を取り逃しては、何國の誰れが贈りしものか、尋ねる便を失はんと氣の急くまゝに後追かけ、出で行く路次の曲り角にてどうとばかりに突き當ると見れば雲突く大の男、物をも言ず妾が持たる包に手をかけ奪んとす。それ取られてはなるものかと一生懸命争へども、手弱き女の力にては到底敵し難くして、あはや無惨々々奪はれんか、殘念なりとしがみつくを個は面倒と云ひながら栄螺の如き拳を堅めて妾を毆んと身搆へするゆゑ、もう是までと包を放す、彼れは拳を下さんとする此時早くも人ありて、今しも彼れが下さんとする腕を捻ぢ上げ後ろざまにどうと計りに抛つくれば、何かは堪まらん四五間先へもんどり打て倒れたり。　不思議に包は手に殘り、辛くも危急を脱れたる其嬉しさに怖さを忘れ、立ちも得去らず恩人に禮を述べんとする時には早や其人は見えずなりたり。　斯かる不思議の一度ならず、打重りたることとなれば、怎か魂も身に添はん、我にもあらで飛が如く、宙と走りて家に歸り、戸をばぴッしやり〆め切りて、はッと吐息をつきながら轟く胸を撫おろし、今の怖さとありし始末を繰り返しつゝ案ずれども、さらに合點の往かざるにぞ、夢かと疑ひ惑へども、現に紙幣の殘るあり。　夢ならずして現かと思へど斯かる大金を故なく贈る人やある。　暫しが程は取つ置いつ途方に暮れて居たりしが、乾度心と取り直し、幾度思案を廻らせばとて仔細を知るには難からん。　詮なきことを案ぜんよりは先づ此の事を父上に申して指圖を請はゞやと既に心に決せしが、又能く思ひ廻らせば、兼ての御氣質曖昧なる金をば怎で受け給はん。　倩ら思ふに此の金は世にありがたき慈善者ありて、親子が今の艱難を救ひ給はん爲なるべし。　然るを父上受け給はねば、其人をして折角の心盡しを空しうせしめん。　只此のみか父上の今の難義を如何にもして救ひ參らす術もがなと日夜忘るゝ暇もなき折柄不思議に手に入りたる金を空しくすることとか。　親の爲には盗をさへしたる例もありとか聞く。　今父上に告げ奉らで、貰ふは善からぬことながら之を資本に精出して働らくときは後に至り、返濟するも難きにあらねば、暫し借り受け危急を凌

ぎ、少しは安堵をさせ奉らんと思ふ心の一筋に勿体なくも父上の知り給はぬと幸ひに隱して金を取り收めし罪は尤も深しと雖も、利慾の爲にあらざることゝ推察ありて御怒を沈め給へと眞實を面に現はし物語る一伍一什を聞き終はり、信種只管呆れ果、手を拱きて茫然たるのみ、暫し詞もなかりしが、稍ありて

「さう理由を聞いて見ると盗をしたといふではないけれども何せ其時に言はなかッた。 以來は乾度嗜なむがよい。 あゝ、轡の音でも眼を覺ますべきものが、如何に太平の世とは言ひながら些ッとも知らずに寢入ッたと言ふも亦不思議といふものだ。 して其の來た男の年齢恰好はどんなであッた。」

「はい暗い處でよくはわかりませんでしたが何んでも四十前後の人とは思はれました。」

「どうも一向合點の行かぬことぢやが、何には兎もあれ、此金は此の儘取ッて置譯には行かないから警察へ屆やう。」

是より親子は警察署に、事の次第を訴へしが、幾もなく其筋より金は其儘下附になりたり。 茲に親子が意外なる金を得たれば之を資本に何がな營業を營まん、あれか是れかと協議を遂げしが、是れぞと思ふこともなけれど兼てお琴が心得ある毛糸商を始めしならば多くの利益はなきにもせよ損することはあらざるべし。 幸ひ兼て出入せし今田屋よりして卸す時は彼是都合もよかるべしと茲に相談纏りて、神田區表神保町に毛糸の店を開きたり。

家政

閨の心得(廿八號の續き)

次に同衾是が最も害の有る物です。 まづ子供が餘り幼いといふ處から祖父母や父母が之を愛するあまり其子供孫達と一途に寢る、一寸表面から見れば如何にも小兒のため宜さゝうです。 が、實を言ふと子供は活氣の強い物、そして老人は活氣の少ない物、それ故老人と子供と一途に寢れば勢ひ子

供の活氣即ち熱は老人の身體に吸ひ取られます。　物の熱即ち温氣と言ふ物は物理學でも說く通り、必ず絶えず冷めて行く物で、其冷め方は冷い物に逢ふ丈早いです。　例を言へば氷に身體を接するのは疊に接するのより早く身體が冷くなる物で、其故は氷は疊より冷い物で、身體の熱がそれに奪はれるからです。　子供と老人と一途に寢るのも此譯で、子供の熱が老人に奪はれるのも無理では有りません。　全體子供には自然に是非入用だけの熱氣が付いて居る物。その是非入用な分を横の者が來て奪へば子供の爲め何うしても害になる譯です。　その證據には斯うして老人と同衾して居る小兒は多く虛弱で、或は顔が蒼白過ぎるとか、風邪に罹り易いとか、胃が弱いとか、何かしら壯健には行かぬ物です。　それ故に一寸考へると無慈悲なやうですが、小兒をば成るべく一人で寢かすのが宜しいです。　勿論生まれた計りの赤子や、またそれより大きくても猶一人で寢るに堪へぬ程の年齢の物を無理に一人で寢かせるのは又惡いです。が、些し成長して五六歳になッたら既に最う一人で寢かすに限ります。

或は斯う言ふ人も有ります、老人と寢る故活氣も奪はれるだらうが父母と寢れば其程の事も有るまいと。　此塲合ひになれば成る程老人と寢る程の害は有りません。　が、猶別に惡い事が有ります。　即ち、第一病氣を傳染する事、第二電氣質の相違から神經上に害を受ける事、この二の害が有ります。　第一病氣を傳染すると云ふ譯は渾べて大抵の病氣はバクテリアと言ッて極微く、中々目には見えぬ程の虫なので、其虫を吸ひ込んで多く新に病氣を持ち出す物です。　其中でも肺病などは殊更左樣で、いらつめ第四號に竹中醫學士も書かれた通り、肺病患者の吐いた痰からバクテリアが立つ、それを吸ひ込んで肺病に爲る者が多い事です。　啻に痰ばかりか、是等の毒は呼吸の中にさへ何萬となく混ッて居る物で、それ故子供が同衾して其父母が無病ならば知らぬ事、もし何かの病氣、其中にも肺病でも持ッて居れば何うしても子供が其呼吸を吸ひ込む譯で、從ッて子供が肺病などに罹り勝ちになります。　始終バクテリアを吸ひ込んで居ても、此方の身體が尤も丈夫であれば恐しい事も有りませんが、風邪でも引いて居るとか、胃弱でゝも有る時には得て毒に感ずる物です。兎に角不斷から慣らして同衾しないのに越した事は有りません。　第二電氣質の相違から神經上に害を受ける事と云ふのは一寸妙な事です。　誰でも人間は身に電氣を持つ、其電氣

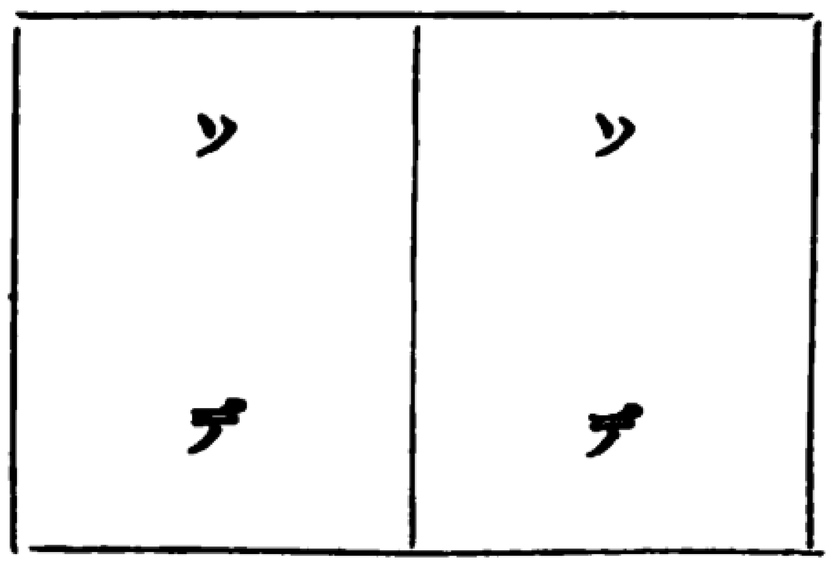
Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

にも積極と消極と即ち陰と陽との二が有ッて陰電氣を持つ人も陽電氣を持つ人も有ります。 で、電氣は平均するのが性質ですから、陰電氣を持つ人と陽電氣を持つ人と一途に寐ればいづれ何方かゞ勝たれて平均する譯で、その結果は翌朝になッて或は肝癪が起つて腹立たしくなるとか、氣が鬱いで堪らぬとか、すべて精神が常を失ふのみか、また顔なども或は蒼ざめたり何かして隱然病氣の遠い原因になり、其他前言ッた精神の變化が重なるに從ひ、終に其樣な性質に精神が全く變はり果てゝ仕舞ふなど言ひ盡くされぬ害があります(未完)

裁縫獨學び(初等の部第二)廿八號の續き

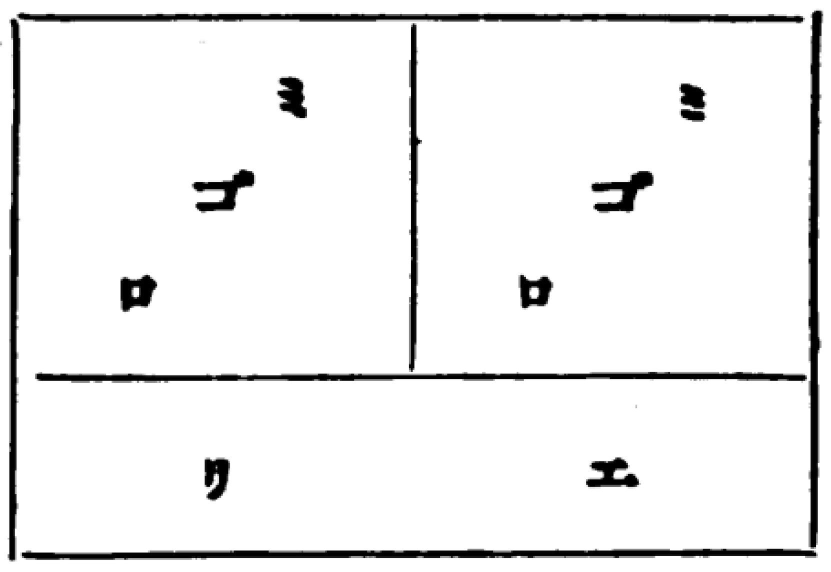
木下貞子

四身襦袢の裁縫法



四身襦袢を裁縫するには通例常巾一尺五寸を用ゐます。 丈一尺五寸、袖丈一尺五寸衿肩一寸七分裁ち切り、衿は身頃の端から取ります。 身市一杯袖付き五寸二分、袖巾七寸、衿巾一寸一分の出來です。

上の圖は一丈二尺の布で四身襦袢を裁つ圖で、袖丈は一尺五寸、丈も一尺五寸、衿肩は一寸七分、すべて本文に言ふのと同じ事です。



裁縫獨學び(高等の部第二)廿八號の續き

木下貞子

綿入羽織の裁縫法

第一に表袖を縫ひ、躾糸を掛け、次に裏へ袖口をかけ、又袖下を縫ひ、次に裏表に補巾を度り、次に背を縫ひ、後巾前巾肩巾を度り、前下りを縫ひ、次に左右の襠をつけ、それから裏表の袖を付け、綿を入れるのです。 其絎け方は第一に袖口と絎け、次に前端を縫ひ付けて後に衿を付け、又絎け付け、次に背縫ひと襠とへ布綴ぢをし、そして衿へ躾糸をつけるのです。 男羽織の寸法は丈二尺五寸、後巾八寸、前巾五寸、袖丈一尺四寸五分、行き一尺七寸五分、袖口八寸、衿巾一寸九分又は二寸、襠巾二寸、前下り一寸、紐限け背縫から一尺を常尺とします。

女小袖縫ひ方及び絎け方

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

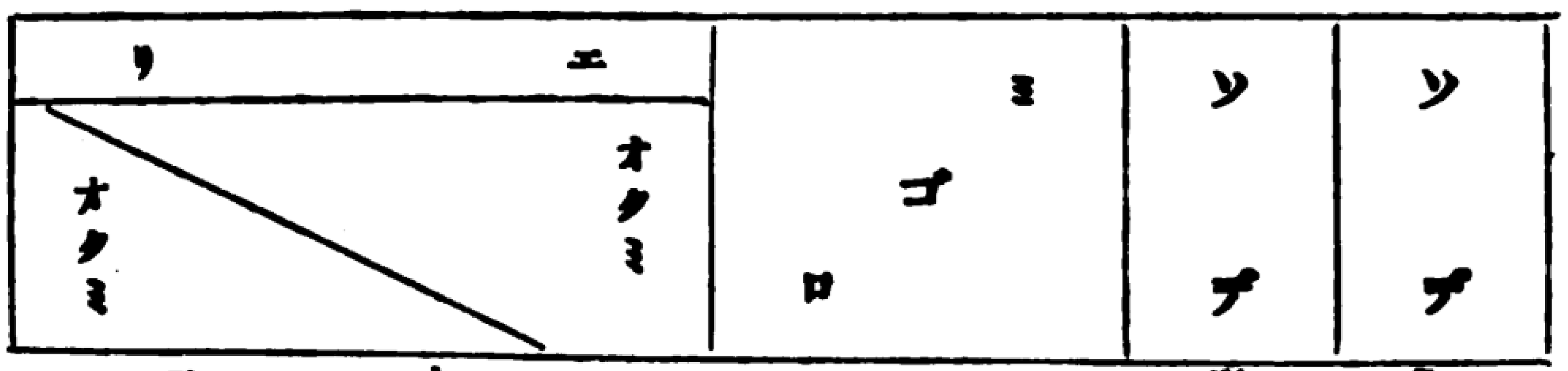
小袖を縫ふには第一に表袖を縫ひ、次に裏袖を縫ひ、表の背を縫ひ、後巾前巾を度り、折り目をつけ、脇を縫ひ、袖をつけ、前巾及び抱きの巾を度り、其中程を度り、折り目をつけ、左及び右の衽をつけ、背から左右へ衿をつけ下し、その後表に準ひ、裏を縫ひ、次に表を自分の方に、裏を向ふの方に持ち、裾口を縫ひ、裏を自分の方に、表を向ふへ持ち、褄を縫ひ、裾口と褄下とへ丁寧に躾糸をかけ、又双方の縫ひ目へ烙鏝をかけ、正しく畳みつけるのです。

綿を入れる時は第一に前の方を見て引き伸ばし、夜着畳みにし、裏の方を好い程に巻いて引き返し、其儘に表と引き伸ばし、裾口から三寸程の長さに肩の處まで綿を置き、裾綿と袖口の綿とを含ませ、表へ揃へ、裏を引き伸ばし、又前の方へ綿を置き、表の前の方から袖へ手を入れ、袖口と袂とを一處に持ち、引き返してよく引き合はせるのです。

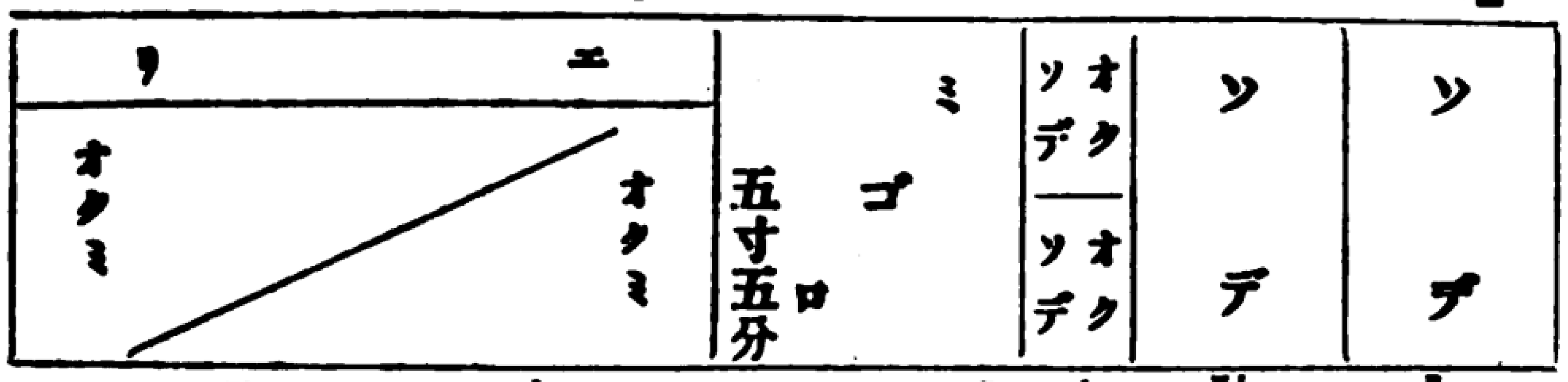
絎け方は第一に袖口を絎け、次に衿を躾け、次に横綴ぢをし、衽の縫ひ目を綴ぢ、衽巾を度り、褄下を絎け、布綴をしその後所々に烙鏝をあて、正しく畳むのです。

掻い巻きの縫ひ方

第一に表袖の口先きへ裏袖を縫ひつけ、表の方へ折目をつけ、隠し躾糸をかけ、それから袖下を縫ひ、躾糸をかけ、次に背縫ひをし、次に脇縫ひをし、袖をつけ、前巾を度り、左右の衽とつけ、又衿をつけ、次に表にならひ裏を縫ひ、裾とおはせ、褄下を縫ひ、次に衿先きを四五寸程縫ひ、躾糸をかけ、双方の縫ひ目を正しくし、その後衿から綿を入れ、引き返して衿と奥袖を絎け、後に所々を綴ぢつけるのです。これに入れる綿は大抵八百目を度とします。圖が有ります。



二丈六尺の切地で掻い巻き表を裁つ圖
袖丈一尺四寸五分
エリカタ二寸五分
タケ三尺六寸五分
エリオクミ切地五尺二寸
オクミ長サ三尺四寸
フマレタ一尺八寸



二丈五尺の切地で掻い巻き裏を裁つ圖
袖丈一尺四寸五分
オク袖丈一尺四寸
タケ二寸五分
エリカタ二寸五分
エリオクミ切地七尺九寸
オクミ長サ四尺八寸
フマレタ三尺餘

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

片面染めの物で三身羽織を裁つ法

片面染めとは染め摸樣の品の外紋り付け抔とも言ひます。袖丈一尺六寸、身の丈二尺五寸三分余の裁ち切りで、裁ち方は總丈から六尺四寸と裁ち下し、其端から三寸五分巾を竪断ちにし、之を衿とし、其余を兩袖として、殘りの切れ地を三つ折りにして身頃にし、後の端から袖口を取り、前の端から襠を取るのです。

（未完〇圖は次號）

改良實用衛生料理法

岩間芳松

此號から標題の通りの料理法を成る丈毎號欠かさず載せます。　此稿者岩間芳松氏は明治五年から十八年まで日本料理を職とし、それから西洋料理を研究して終に鹿鳴館に傭はれ實地西洋料理を調へ、其後また横濱のグランド　ホテルに傭はれ、猶二三の西洋人に就いて研究し、大に發明する處が有り、其成蹟が即ち此料理法で、みな經驗の事、一つも想像から出た事は有りません。　其料理の種類は實に澤山な事ですが、すべて滋養と美味とを主とした物で、是から最初の料理心得から初めて次第に順を追ッて揭げます。　因にいふ、岩間氏は料理學校建設の志が有ッてやがて近い内芝邊に作るとの事。其時には此料理法を教科に用ゐるとの事です。

第一　食物調理法心得（吸汁、油揚、煮物、燒肉、蒸物）

第一、吸汁。凡吸汁は、鳥獸いづれの肉と問はず、其の内部に含む所の蛋白質を滲出して製るものなれば、弱火にて充分長く煮るを可とす。

第二、油揚。凡油揚は、揚ぐる品の何たるに拘はらず、最初油を鍋に入れ、之を烈火に載せ、さて揚ぐべき品を入れて、外部へ蛋白質の浸み出づるを止め、且その品に油の吸ひ込まぬやう中途にて火を少し弱くし、又揚り際に至りて火を強くし、猶その品に油の吸込まぬ樣注意すべし。

第三、煮物。凡肉類と野菜類とを雜へ煮るには、先づ其の鍋に野菜と脂肪とを以ッて、肉の外部に浸み出づる蛋白質を止むる爲、弱火にて徐徐と煮るを可とす、然れども煮たる肉は消化惡し、殊に脂肪その汁の中に散りて營養分を失ふものなり、野菜は能く〳〵煮て、柔かになれるを待ちて食するを可とす。

第四、燒肉。此の法に二種あり、其の一は肉を串に貫し、又は鐵網に載せて火に掛け、極めて急速に炙るなり、然るときは肉の蛋白質速かに凝結して、蛋白質の滴出すること少き故に煮るに勝ること萬々なり、然れども其の肉若し身薄なるか、

又は身厚にても燒き過ぐる時は不消化物となる故、火の通し方九分九厘上りになすを可とす。其の二は空氣を密閉して燒く法にて所謂ロース燒なり、此は密閉器(ストーブ)に入れて炙り燒きにするものにて、器内能く空氣の流通を防ぎ、且その温熱の爲に炙り立てられ、食物內部の水氣と、外部より用ひたる脂肪との爲めに程よく燒くるなり、斯くの如くせる肉は、脂肪蛋白の飛散少きが故に味頗る佳し。

第五、蒸物。蒸發氣を用ひて肉を燒く法二種あり、其の一は沸騰したる湯の中へ肉を入れ、先づ其の肉の外面に蛋白質を凝結なさしめ、而して少しく温湯となして火を通すなり。其の二は沸騰したる湯の上に蒸籠を載せ、さて蓋をして急に烈火に蒸す法にて、此れも最初は火を烈くし、中途に少し弱めにして通すべし、煮過せば大いに消化を害すべければ能く注意すべし。

以上は調理法の大要にて、煮燒の心得大抵之に過ぎず、要するに調理は肉の內部に含める蛋白質の浸み出づるを防ぎ、堅きものを柔かにして消化易くし、すべて衛生に實なきやう務むるを本旨とす、猶これより實物に付きて、細に其の法を示すべし。

文藝美術

內閣官報局新定送假名法(廿七號の續き)(此送假名法に限り轉載自由の事)

又一種動詞一轉シテ形容詞ニ入リ再轉シテ副詞トナレルモノアリ其送假名ハ動詞ノ變化スル處ヨリシテ寫スコト猶ホ形容詞ニ於ケルガ如シ其例左ノ如シ

願ハシク　歎カハシク　紛ラハシク
賴モシク　好マシク　羨マシク

(三)「テ」ヲ履ム副詞　「テ」ヲ履ム副詞ハ動詞ヨリ轉成セルモノナリ其例左ノ如シ

初テ　始テ　甫テ　定テ　極テ
凡テ　都テ　渾テ　總テ　敢テ
肯テ　以テ　却テ　反テ　因テ
依テ　就テ　尋テ　次テ　强テ
兼テ　豫テ　追テ　重テ　積テ

右動詞ヨリ轉成セル副詞ノ送假名ハ正則ニ據ルトキハ當ニ動詞語尾ノ變化スル所ヨリ寫スヘキモノニシテ例ヘハ　極メテ　總ヘテ　始メテ　因リテ　就キテ　等ノ如クニ寫スヘキナレトモ今慣用ニ從ヒ右ニ示セル如ク單ニ「テ」ノミヲ寫ス方動詞ト區別スルタメ却テ便宜ナルモノヽ如シ故ニ玆ニハ正則ニ據ラスシテ變則ニ從フ

(四)「ト」又ハ「トシテ」ヲ履ム副詞　「ト」又ハ「トシテ」

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ヲ履ム副詞ハ漢語ノ語尾ニ「タル」ヲ帶ヒテ形容詞ヲ爲セルモノヨリ轉成セルモノナリ其例左ノ如シ

寂然ト　確乎ト　窈窕ト　錚々ト

寂然トシテ　確乎トシテ　窈窕トシテ　錚々トシテ

(五)本語ヲ其儘副詞トシテ用フルモノ　本語ヲ其儘副詞トシテ用フルモノハ便宜語尾一字ヲ寫シテ送假名トス其例左ノ如シ

初メ　始メ　元ト　素ト　固ト

但シ「ヨリ」ニテ此等ノ詞ヲ受クルトキハ「ヨリ」ノミヲ寫シテ送假名トス其例左ノ如シ

初ヨリ　始ヨリ　元ヨリ　素ヨリ　固ヨリ

(第二)合成副詞　合成副詞ハ數詞連合シテ副詞ヲ爲セルモノニシテ其送假名ノ附法ハ總テ本來所屬ノ法ニ從フ其例左ノ如シ

是故ニ　此故ニ　其故ニ　何故ニ

是ニ於テ　是ヲ以テ　是ノ如ク　斯ノ如ク

何ヲ以テ　之カタメニ　是カタメ

薄暗ク　細長ク　青白ク　手輕ク

待遠ク　心易ク　見苦シク　手重シ

(第四)熟語副詞　熟語副詞ハ送假名ヲ附セス其例左ノ如シ

大凡　大抵　大概　大約　大略　一切

萬一　過半　總體　大體　全體　畢竟

到底　今般　過般　今日　昨日　明日

昨今　方今　現今　目下　當時　往時

隨時　即今　輓近　近頃　不日　比年

前年　幾計　若干　各自　漸次　逐一

逐次　追次　早晩　流石　只管

今後　以來　爾後　爾來　以上　以下

第一　第三　兩度　數度　數回

但シ一度二度ノ如ク度數ヲ示ス副詞ニシテ訓讀スルモノハ左ノ送假名ヲ附ス

一タヒ　二タヒ　十タヒ　百タヒ　千タヒ

又再ノ字ニハ單ニ「ヒ」ノミヲ寫シテ送假名トス

(第五)疊字副詞　疊字副詞ハ同音又ハ同訓ヲ重ネテ副詞ト爲シタルモノニシテ同音ノモノニハ「々」符ヲ附シ同訓ノモノニハ「〻」符ヲ附ス其例左ノ如シ　(未完)

第五回懸賞文藝應募得點者

題　うつり香（文章の部）

あゝあの親しい朋友、あゝあの懐かしい親友、今は何處！暑さを洗ふ虫の聲、心を慰むる笛の音、皆斷腸の媒となりました。　手を連ね、笑顏を造つて寫した面影は今は血の涙の源と化しました。　あゝ取り出す此寫眞。　ても愛らしいその口元、何故言葉を出さぬか。　ても麗はしいその容貌、な

せ笑靨を示さぬか。　共にかざした薔薇の花はこの人が手折ッた贈物です。　此花の香ひ、この人の心ばえ、どこに區別が有りましやう。　あゝ香しいそのうつり香！杜鵑も血を吐くか、そのうつり香に泣く妾の心に比較して。　顧みれば夢に夢、春の晨、秋の宵、袂を連ねて睦み語ッた愉快さ！けれど其愉快はたゞ暫時の夢で入相告ぐる鐘の音と共に痕跡を拭ひ去りました。　夏の涼み、冬の爐膝と交へて盟ひかはした約束の堅さ！しかしその約束はたゞ過去の幻となり旅路に急ぐ彼の人と共に此世を去りました。　たゞ忘られぬのはその愉快、消せぬのは其約束です。　あゝ慕はしいその面影！懐かしいそのうつり香！天地は悲みの精でしやうか。　見る物毎に、聞く事毎に悲みより外では有りません。　妾の身は涙の宿でしやうか。　物に觸れては涙の雨、事に感じては涙の瀧。　人には樂しい天地でも、人には喜びの物事でも妾には悲みの雲、涙の雨を起させる其中立ちはそも／＼何。　でもいくぢないこの身、何故烟とならぬか、すこしも早くあの傍に。　風の送るその香ひ、わが身に薫るそのうつり香、もし此香の持ち主をこの身の前に連れ來たなら世界を擧げて其心に任せるのに何で躊躇しましやう。　あゝ妾の願ひ、妾の祈り——人々！神々……………右……………青柳いち子（トヤ）

右いらつめ四部進呈の分

長閑な春の空、永の日も漸く老いた爲めか彌生のたそがれ時に帝位を讓ッて、餘波惜しさうに沈んでしまひ、それを弔ふ爲めか間もなく蒼い鏡の雲間からさし登ッた新月が、白絹のにしきで裝ひながら優美な素顔で淡藍の霞に包まれて居る梅か枝に、宿ッて居ます。　四方の山邊も今は哀れを示して、黒い法衣を纏ひました。　誠に淸らかで、そして愛らしい景色はたゞ春の夜の固有です。　むかし蘇翁が言ッた「春宵一刻値千金」夫も無理ではありますまい、樂しむ爲めの夜ならば。　しかし人の心ほど無情なものはありません。　悲しんで迎へれば咲きみだれた花も哀れに見えるもの。　喜んで迎へれば散る花も奇に見えます。「世は世、定めなきこそいみじけれ」とはまことたれやらに斗り觀念の句ではありませんでした。　無心の人には樂しく映る今夜の月、さりながら怨のある妾の身には憂の種。　憂のない人には心よく香る梅、さりながら悲のある妾の身には涙の源。　思へば人間はぞかよわいものはありません。が、愛の覊絆、どうしてそれを絶れましやう。　世界を取繞るものは空氣。　人を取り縛るもの

は愛。　空氣がなかッたら世界はどうなるでしやう！人に愛がなかッたら人間はどうでしやう！妄想や物思はみなこの愛に孚まれた小兒、思ひ切ることの出來ぬも穴强ち尤める迄でもありますまい。「色よりも香こそあはれとおもほゆれ、たが袖ふれじ宿の梅そも」。懷舊の思にうつる君の貌は美麗でした、新月の素顔よりも。　君の眼から晃く愛嬌は雲間から下界を覗く青空よりも濃く、君との接吻は梅が香よりも芳しく、君の眞心は花よりも潔白でした。　君の手を採り、君と相抱いた樂しさは天も地もなく善も惡も――精神が君の愛の渦に溶けました――愛ハ情に、情は愛に合奏して。　唇も頰もみな嬉しさに烹られて、全身震へたほどでした。　人はただ影、生は夢。　あゝ妾の最愛の君――君の爲には、名譽も、財産も、利祿をも投ッた程の其君――ハはや敢なく――天國は最後の庵！この愛情も無殘な、鏡に翳した花。　無慈悲な水に映した月。　既にあだしのゝ萩の露、秋風にあぶるゝ玉川の水とは、そも〳〵これが浮世でしやうか。　二世と契ッた弘誓の船の綱手も敢なく切て余る緖をつなぐのはそも〳〵何です。　たゞ嘆息失望に乘ッて居る煩惱、これが長の別の遺物です。　峰の根方に宿る雲、松の梢を潜る風。　同じ身の行末、それさへ今は嘲ッて居るやうに見えるいぢらしさ！なげきは唯むかしの君の俤を思ひ出させるのみです！

君の家に昇ッて君の墨の跡を見れば、君の懷しい影が見え君の机を眺めれば、君のやさしい姿が顯はれます。　あゝ、「氣の迷」…では無いか。　此後妾の身に伴ふ世界の愉快は失望を代表した「嗚呼」の一言葉で消されます。　すべてあらゆる世界の象は皆悲しさの三字に封せられてしまひ、君と手を携へた樂園の榮華も想へば前世の夢でした。　噫無念、そもそも何の因果でしたらう。「なげゝとて月やは物と思はするかこちがはなるわが涙かな」。　やはり同じ身の境遇です。見ればあの素顔の月は忽ちみる間に叢雲にかくされて姿も見せず、くやしさうに吹く夕風に枝から梅も散ッて哀れを添へたばかり不覺に又くもります。　あゝ愛らしい春もまことに瞬間の夢！まして浮世の影にたつ人間、夢か、天の浮橋！つまり春の野山のかげろふの又の名とも思はれます。…………

右…美然堂主人（センメイ）

右いらつめ二十四部進呈の分

外に猶一等賞に拔けた人が二人有りますが、餘白の無いため其文章をば次號へ回しました。

寄書

料理の目的

伏水　小雨漁史

料理は御婦人達に極めて入用です。さすがいらつめ「いらつめ料理」「甘藷百珍」などと外題を附けて掲げられました。此等は實地の方です。私は幾分か理論がゝつた事を述たう思ひます、先つ大體から。

料理の法は古くから我國にありました。そして中々盛んでした。外の學問の開けぬ前には存外進でゐたのです。が實用よりは儀式が主になつてゐました。無論理論は誰も說たものはありません。西洋では他の學問とともに餘程進で既に「クツケリー」とて一つの學科を作てゐます。それのみか割烹學校が立てゐます。何れ日本にも割烹學の書籍も翻譯が出來、又西洋料理の事を書た書物もあります。が不完全で割烹學の書籍とは受取れません。學校も出來ましやうが。私はこんな書物や學校の出來るのを待てゐます。

料理全體の目的を云はば定義は何でしやう。身體に必要な滋養物を適當に擇び其を消化に適する樣にするのです。此等の方法を研究するのが割烹學です。いま少し詳しく他の關係も申しましやう。一方は天產物一方は人間の身體天產物が身體の組織になるまでの道行は澤山ありますが、割烹は其の一つです。其の順序は、

天產物　天產物とは云へ農業の一部分を要します。
採取　海菜、獸、穀物採收など。
製造　肴を乾物にし肉を罐詰にするなど。
割烹　食物を洗つたり煮たり燒たりするのたぐひ。
消化　咀嚼、嚥下、胃腸の化學的作用。
吸收　腸內より血管內に移轉なること。
身體

此等の順序を支配する學科が其々あります。採取は農學、水產學等、製造は農學應用化學割烹は割烹學消化と吸收は生理學です。そして衛生學は割烹以下に關係し幾分か製造に關係します。其道の專門家は別として誰しも一樣に心得置ねばならぬは衛生學の關係する割烹以下の事柄です。

唯今順序を述べましたが此の順序が何時でも卒く備てゐるものではありません。時として欠る事があります。例は生魚は製造しません。果物は大概は製造も割烹もしません。しかし果物の皮をむき種をとるなどは理論上より云へは割烹です。動物界で製造や割烹をするのは人だけです。他の動物では製造や割烹をせぬ代りに初め胃腸などが强くて人が手こずる製造等の仕事も口や腹でします。また同人間でも世が開け人種が高尙なほど製造と料理に念を入れます。創世記の時代や野蠻人では此等の事は殆ど皆無です。野蠻人は動物の性に近く文明人は反對してゐます。進化論者は一つの證據とするでしやう。

動物では割烹は全くなく野蠻では殆ど零に近い點から見ると割烹は消化の中より進化につれて分業になつたものと思はれます。だから割烹を人爲の消化と見做しても決して誤とは申しません。

全體のお話は先づ是でお預りとして、割烹には澤山の目的がありますから、其を一々申しましやう。併し割烹の目的とは餘り人の云はぬ事で、目的と方法をごつちやにする人がありますから、御注意を願ひます。何にするかと云ふのが目的で。何にすると云ふのが方法です。米を炊く爲め米を炊くとは云へません。米を暖く軟くする爲め炊ぐのです。暖くすると軟くするとが目的で、炊ぐが方法です。私のお話し申は目的の爲です。目的も方法も澤山あります別して目的の方が多うムいます。しかし一つの方法で二つ以上の目的を達する事は澤山あつても、一つの目的を達する爲め二つ以上の方法を用うるとは極めて稀です。だから目的が幾ら澤山あつてもおさんどんの御迷惑にはなりません。

第一　不消物を除く。食ふことの出來ない部分を取て捨るのです。縱て硬くて齒にあはない樣なものは取てのけなければなりません。こんな物を混せて食ふと必す齒や胃を傷め升。鰹汁とか稱へて鰹の節をふかずに汁にするとがありますがよくありません。肴の骨を去り精進物では筍の皮をむくなどは此の目的です。

第二　不潔物を去る。肴の腸を去て芋の皮をむくなどの類です。米を洗ふも大根を洗ふも皆な此の目的を達する爲めです。此は注意しませんと中毒します。肴に

中られるなどハ肴が古いからでハありますけれど、洗ひの足りないのも一つの原因になりますからよく注意しなければなりません。

第三　細分す。其盛でハ食ひにくうございますから小さく切り分るです。魚類でも精進物でも切るのハ此の目的です。が通例ハ鯉の骨きり小鳥の骨たゝき大根おろし瓜なますなどです。此れは咀嚼を補けるのです。

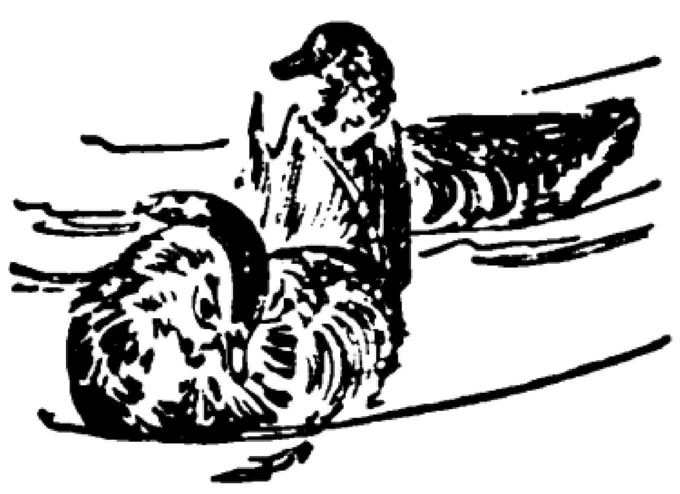
第四　必要な滋養物を配合す。小兒に對する母乳か牛乳かをおきましては、他に一の食で必要な滋養物を盡てゐるものハありません。人は一の滋養物で生命を繋ぐことは出來ないものです。それ故適當な滋養物を供へてゐる食物を彼是取合さなければなりません。肉類にハ蛋白質や脂肪分を多く含でゐますが澱分が少なふございますから、鹽や醬油などを加へて調理するのです。日々飯と菜漬物などを取合すのは全く此の目的です。

第五　分量を斟酌す。過たるハ猶及ばざるが如し、多くすぎても少なすぎてもいけません。全体の分量も各滋養品の分量も年齢職業價格等で斟酌しなければなりません。生落てよりの習慣で大人ハ此位小兒ハ此位と、全體の分量ハ斟酌しますが、各滋養品の割合に注意する人は極めて稀です。唯旦那ハ肴下女は漬物、今日ハ味噌で明日は一日だから燒物などと、奇妙な斟酌をする人が時々あるのみです。是れは割烹する人でなく食人の注意ですが、腹八分目さハ千古金言と思召せ。

此項と前の第四項とに述べましたハ極必要なとで、割烹に關する衛生學の主眼ですが、話が枝端にもなり餘り長たらしくもなりますれば略しましやう。何しろ必要な事ですから折を得ましたら詳しく述べましやう。私風情が申さずとも別に申す人もございましやうが。

第六　溶解せしむ。脂肪の他は如何なる滋養物をも溶解しなければ、腹中で吸收されません。消化は食物に化學的變化を起さしむると同時に必ず理學的に溶解させるものです。人工に豫め食品を溶解するは必要のことです。肉汁ハ肉類の溶けるだけ溶かしたもので最もよい食物です。西洋人ハ大概日々三度とも肉汁を吸ます。が日本料理にハ此の物ハ一向ありません。昆布だしや松魚だしを例にとらなければならぬとは殘念でハございませんか。

（未完）



小説

鴛鴦

第七回　睦ましき一對の親子

麴亭飯人

雨の日は心ぼそきものゝ別けて掻きたるゝ五月雨の空、若葉の生ひ茂げりて薄ぐらき、郭公の啼き渡りて物すごき、見るに付け聞くにつけ、世のあはれも人の戀しさも増さらでやはある。されば一ト間の話しさへ濕りがちにて、

「妾が一番惡いのです、良人の執拗なのを承知して居ながら、往くなといふのに往ッたもンですから、しかし其れも實ハ良人が彼の通り難義して居るゆゑ、何卒早く麗刺なり編物なり覺えて、些しは小遣ひの足しにでもと思ふての事、今日と成ッて見れば誠に意外だ譯で。」…………

「眞個に困た事に成たのう、しかし人の噂も七十五日、其の内には如何にか成るだらうから、餘り心配して病氣にでも爲らないやうにおし、其れに汝父さんも大層心配して在しやるから。」

「眞個に慈父さんの御心配は容易な事ぢやございませんよ、それだのに如斯埒が明かないンでものを、慈母さんは久

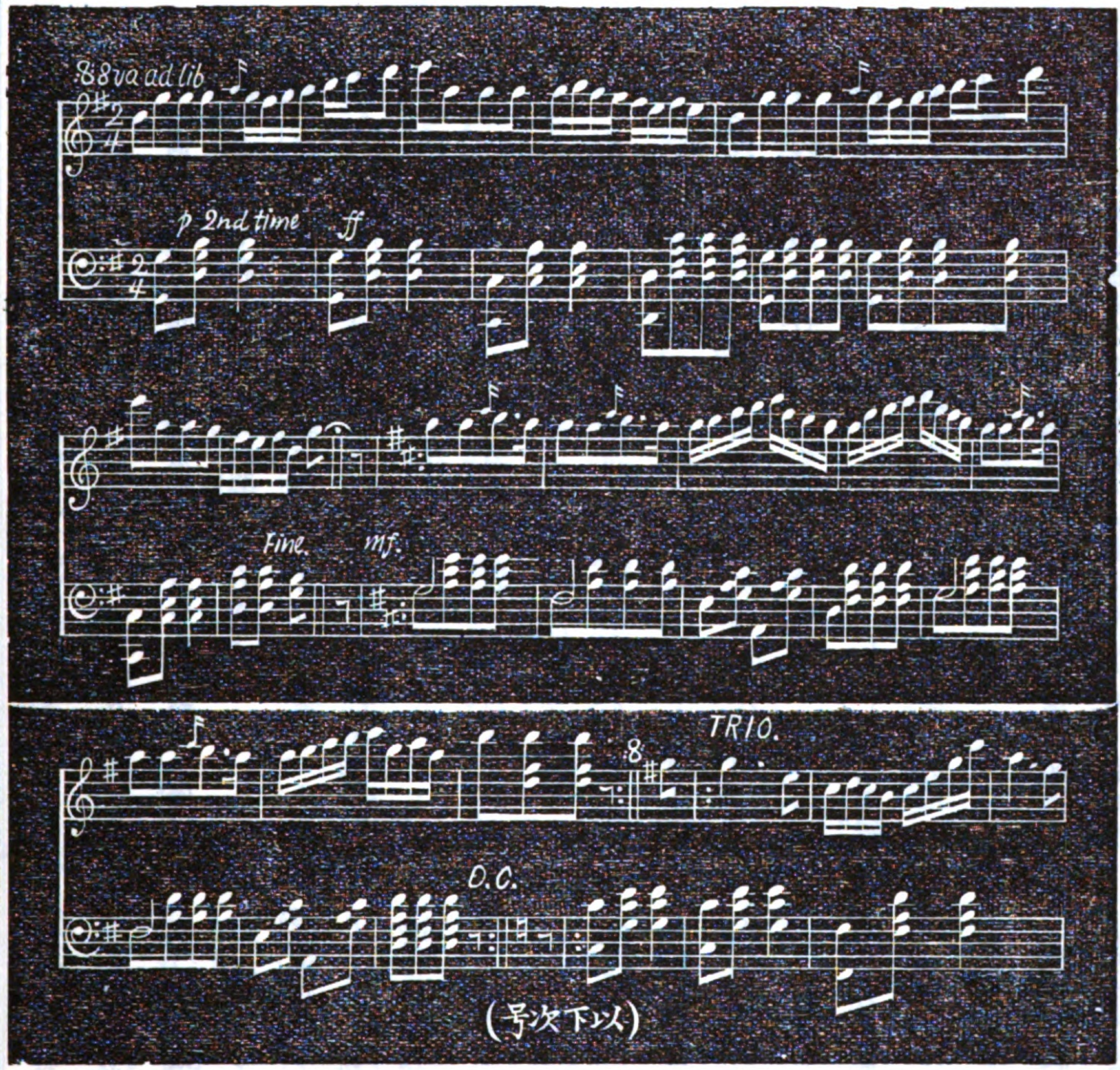
しく田舍にお在だから、前方の事は御存じでございますまいが、それはく慈父さんの御心配と云ッたら」。……
「昨夜聞いて驚いたのさ、私は其な事とも知らず、淸が止めるもンだから、今日は歸る、明日は歸ると毎日のやうに思ひながら、遂うかくと長く爲たのさ、それに淸も長野縣では大層評判が好いので。」
「それは何よりでございます、が、慈母さん、斯いふ時にはつくぐと然おもひますよ、若し兄さんが東京にお在なすッたら、此な喧ましい騷ぎに爲りますまいにと、良人も執拗だけれども兄さんには頭が上りませんからねえ。」
「然さのう、淸が居れば又如何にか」。
といふ折から「郵便」といひさま脚夫が格子から投げ込むを見れば、一葉の端書にて、しかも單簡なる文言、
拜啓至急其筋より御用召に付き明日出京可致候委細は拜眉に讓る春日井麗左衛門樣 同 淸
「慈母さん、兄さんが御出でになりますよ。」
「え、淸が來ると……如何して。」
「御用召で。」
「然かえ、それはまあ宜い都合だが、何の御用だらうの。」
「何だか知れませんが、惡い事ちやございませんよ、屹度吉い事なンですよ。」
「然うだと結搆だがのう。」
吉きに付け凶きに付け子を案じるは親の慈悲、燒野の雉子夜の鶴、古き譬に洩れざるぞ現に有り難き。爰に又春山芳香は彼の怪しからぬ風聞の爲、俄に諭示辭職を命せられたれど、固より好ましき學校にあらざれば、却ッて之を勿怪の幸として、畵學研究に他念もなき、心を其なる母さへ知らず、我が子の事を彼れ此と、世の取り沙汰に聞くに付け、時々芳香に云ひ聞けゝるが、今日も又一ト間に招きて、
「異個にお前は虫が好いよ、此の頃の『輸入』を御覽、『隱語隱語を解いた師直』だとか『西片町の片思ひ』だとか、種々な事が書いてあるぢやないか、些しは何とか言ッてやるが可いよ、學校を免せられて、そして耻を晒してさ、何ンのつまらない。」
「慈母さん、然あなたの樣に氣にしちやなりませんよ、何も私が間男したの、人の娘を如何したのといふ覺えはなし、新聞が如何書かうが、人が如何云はうが、自分さへ潔白なら、其れで可いと私は思ひます、彼れ此れ此方が云ふ

丈風聞を大きくするやうなもンです。」
「さあ其れだのさ、虫の宜いといふものだよ、此方に曇がなけりや何處までも威張ッて出るが可いぢやないか、此樣な風聞のあるので私までが外聞が悪いからさ。」
「成程外聞が悪い悪いとば悪いやうなもの丶、是も一時の事です、其の内に事が判然して御覧なさい、是まで私を誣ひたものが、如何なに面目を失なふか知れやしません、其の上今の新聞なり風聞なり、皆區々な説で更に取り止がありません、此の頃の『日々』では私と生徒と譯わッたやうに書いてあるに、あなたか今被仰ッた『輸入』では人の妻と奸通したやうに云ふて有ッて、孰れが如何だか更に分明ません、それと此方から威張り出すのは風を捕らまへに出るやうなものですから、私は決して騒ぎません。」
「然いへば、まあ其ンなやうなものだが、しかしお前の辭職させられたのが一番評判の源因だから、先づ其の方から云ひ開らきして貰ひたいのさ。」
「それは不可ません、云ひ開らきといへば申し譯も同樣ですから、しかし慈母さん、然氣にせずとも其の内に形が付きますよ、私も思ひ當る事がございますから。」

「あるえ、あるなら御話しな。」
「ろれぢや御話しするけれども、しかし是も當推量ですから、高くは云はれせませんが、實は同寮の……慈母さんも御存知でせう、あの石田といふ男を、彼れが春日井の娘に大層熱心なので如何かして手に入れやうと種々骨を折たさうだが、當人は如何しても承知せず、然るに石田は時々私に向ッて、君は春日井の令嬢を貰ふ氣は無いかの、世話をして上げやうかのといふから、妙な事をいふ男だと思ッて居るうち彼の書簡一件で私と春日井嬢と何か理由あるやうに校内で評判され、其れから石田は私を見る度ごとに變な事を云ふけれど、さまで氣にも掛けなかッたが、今おもへば左樣事から彼が搆造して、如此な騒ぎに成ッたンだらうと思はれます、だから其の内には彼れが化の皮が顯はれませうから、まあ〱暫らく打捨ッて置くが一番です。」
「うう、左樣な事が有るのかのう、それぢや其れに違ひないよ、しかし彼の麗繻の無叢は如何したのだらう。」
「さあ其れが未だ分りません、が、それも矢張彼が奸計の中だらうと思ひます。」

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

樂曲落葉ばるか（前半篇）



（以下次号）

最上髮油製法（ポメータム　デヴァイン）

最上髮油はポメータム　デヴァインと言ッて左の製法で出來ます。之に越す髮油は殆ど無いとも云ふ程で、矢張り製法も面倒ですが、此油を常に髪に用ゐながら、硼砂を薄く解かした水で折々髪を洗へば髪は如何にもよくなり、癖も治り、色艶も加はります。尤も前々のいらつめに出した鯨頭油や白蠟を用ゐて作る髪油も決して悪い物では有りませんが、此法のに比べれば手數が少いため一寸どちらかと疑ふ人も有りさうな事です。手數の割りから言ふと前々の法も宜しいです。唯どうしても金が掛かるだけ此法の方がいくらか前のより優ると言ふだけの事です。

牛の脂（髓ならば猶よし）三ポンドを陶器の瓶に入れ、冷水に漬け、一週間この水を日日換へ、第八日目には冷水の代はりに薔薇水を用ゐ、第九日目に水を充分に切り、龍腦四オンス、ベンヅイン四オンス、松脂四オンス、オリス粉（菖蒲の種類藥店に有升）一オンス、肉桂、丁子、肉荳蔻各半オンス、此七味を此順で交せ、熱湯へ瓶と入れて三時間暖め、それから絹で濾

すと、美事な油が出來ます。　用法は勝手で宜しいです。腐敗せぬ間は用ゐても宜しいです。　常に用ゐぬ間はよく瓶の口を密封して、なるたけ温まらぬ棚へ置のが宜しいです。棚も又冷え過ぎる處はよく有りません。

諸物數へ方（廿八號の續き）

獸類　一疋（×）一頭（△）○鯛　一疋（◎）一尾（△）一折（×）一掛（×）○他の魚類　一疋（◎）一尾（△）○干鯛、干鰺、干鰈、乾物の類　一枚（×）○鰤、鱒、鮭、鰆の類すべて平たく無い魚類　一本○鰻　一本（◎）一筋（×）○鰹節　一節（×）一本（◎）一連（つらねたもの）○章魚　一杯○貝類、烏賊　一杯○蒲鉾　一板（×）一本

ほとんど際限の無い事ゆゑ此位で跡は略します。　（完）

國語故事づくし（其二）

いさめし杖　支那に伯瑜と言ふ人が有つて母に撻たれて泣きました。　母がいぶかり、日頃泣かぬのに今日に限り撻たれて泣くとは何事かと問ふと答へて日頃は撻たれても痛くあつたが、今は痛くない處を見れば、母が老衰したに違ひ無い、と思ふと悲しくなると言ひました。　この故事によりいさめし杖と言ふ言葉が用ゐ出されました。

いしのみまし　夫木集に光俊朝臣、「尋ねかね、けふ見つるかな、千早ふる深山の奥の石のみましを」とあります。鹿島明神の社内に石が有つて、明神が天降りして其石の上で座禪をしたとの言ひ傳へが有る、それを石のみましと言ふのです。

ろ　（ろには何もありません）。

は

羽をならべ、枝をかはす　比翼連理といふ譯で、深い契りを言ます。　白樂天の長恨歌に「在レ天願作二比翼鳥一、在レ地願爲二連理枝一」とあるのに基づいたのです。

花かづらする　三月の節句柳でつくッた鬘をつけた風がありました。　それを花かづらすると言ひます。　藤鬘、葛鬘などもありますが、皆花かづらと言ひます。　西洋のガァランドと同じ物です。　新古今に家持の歌とて、「から人の舟をうかべて遊ぶてふ。けふぞ我がせこ花かづらせよ」とあります。

花をかざして老のかくるゝ　躬恒の歌に、「かざせども老もかくれぬ、この春ぞ花のおもてもふせつべらなり」などあるそれから出た句で、花を簪せば老も知れぬとの意味です。

花の鈴　唐の玄宗帝が牡丹を愛するあまり、鳥の來るのを憎み、楊貴妃と共に牡丹の花に鈴を結びつけて鳥を逐つたといふ故事から出た言葉です。

花しづめ　令義解にも見えて居ます、花の咲く頃疫神が世に散つて人をくるしめるとて夫を調伏するためにする祭りを言ひます。　一說に花を散らさぬために風を祭るとも言ひ

ます。

はらへ草　御秡と言ッて六月三十日に（後世で言ふ胎内くゞり）祭りが有る、其時祭りに人形を用ゐますが、それをはらへ草と言ひます。

はらかも我君のため　腹赤といふ魚です。景行天皇の御時肥後の長濱の者が此魚と釣ッて献上したのが始めでそれからは毎年の節會に定まッて供へる事になりました。鱒の事だと言ひます。　はらかも我君のためとは二位中將の歌に「初はるの千代のためしの長はまにつれるはらかも我君のため」とあるのから起ッたのです。

婦人雜誌一樣の改良

不思議な事も有れば有る物、文明の母が月一回發兌を二回に改めると言ふかと思へば、女學雜誌は政治上の事をも論議する雜誌となり、又いらつめは月一回發兌が月四回に飛びました。　其改正いづれも言ひ合はせたやうに殆ど同時でした。文明の母はまだ見ぬ事ゆゑ何とも言へませんが、女學雜誌は如何にも一進歩されました。　唯惜しむのは猶御手慣れぬためか改革以後の第一回は大した出色の處も見えず、僅に政治上と言ふだけの物が載ッて居たやうでしたが、引き續いて第二回は天晴な物になりました。　主義に於ては素より吾々と違ふ事、仕方も有りませんが、兎に角女學雜誌のこの度の勇氣は詢に敬服します。

小説

その一　しづく下

美妙齋主人

「よくは存じませんが、ね」　阿黄楊は氣に掛かる枕を置きました。　そして聲と共に眉をひろめ、「あの千塚さまの匕加減でしたといふ事ですが御存じですか。」

匕加減とは、死んだのに匕加減―　怪しい言ひ草、聞き捨てには爲りません。

「そ……れは又何う……」。　主婦が唯これだけ。

「いえ、ね、千塚さまの内弟子に博野さんてへ方が、ムいましやう、あの方と懇意でムいますが、ね」、　思ひ附いたやうに聲を代へて、「何ですねェ御醫者ッてへものも薄情なもンでムいますねェ。」　答へずに唯われを見詰める主婦の体に阿黄楊は一層身を入り込ませました。――

「本氣になッて掛かれば病氣ッてへ物は大抵左樣治らない

物でも無さうで厶いますよ――その博野さんが申しました。あの何だか立ち入ッたやうな御咄しで厶いますが、千塚さまが阿孃さんと先に何とか仰やッた事は厶いませんでしたか」。

混み入ッた問ひ。只ならばこの愁嘆の中うなづくだけでも否。しかし、蜜を求めては蜂の針をもいとれぬ世の中、何か忠告らしい阿黄楊の口振りを聞けばその奥底を探りたさの望み、目的も出來て、今は涙も何處へやら。

「はイ、左樣仰やればそんな事も厶いましたよ、昨年の事で厶いましたが、千塚さんが、まだ獨身ゆゑ彼を貰ひたいと仰やッた事が厶いました。」

「あゝそれで厶います、それぢや全く。　そして何で厶いましやう、阿孃さまには別に御婿さんが大抵御きまりに爲ッて居て、それで千塚さまの方をば御ことはりに爲ッたので厶いましやう。」

「はい左樣で厶いました。　御存じの通りあらかた婿も決まつて居りますので、それで千塚さまの方をば斷りましたがそれぢやそれが何か根で？」

「で厶いましやうよ、まづ根だと博野さんも申しましたよ。元千塚さまは大變阿孃さまを貰ひたいと思しめして居らッしやつた處が、それが思ふやうに爲りませんでしたもので――なンて博野さんの口振りは先左樣で厶いましたよ。　ぢや此方さまにも御心當りが御有りの事で厶いますねヱ。」

意外と言ふのも言へぬ程の怪しい忠告。噓か、眞か、其處は分からず、しかし言はれただけの事は主婦の胸にも答へました。　病人の枕元にあッた藥瓶、それもまだ捨てられずに殘ッて居る、その方へ目がまづ一向き。向いたばかり、思案や分別とは今嘆きが横へ押し片付けて居る境界、その說の眞僞を考へるよりは唯阿黄楊が頼もしいやうに思ハれました。が、それも唯それだけ、更に其忠告の奥を深く問ひ正す心は混み上げる千萬の思ひに封せられて役には立たず、何か死んだ阿末が幻の姿をあらはして我身を掴みに來たやうに心持ちもうッとりと爲つたやう。果ては座に堪へなくなッて、わづかよ一言二言言ッたばかり。次の小部屋へ入ッて、床を取らせて――それまでが僅に正氣でした。床へたふれるや否や一度にほどばしる涙。其座敷には早人の出入りも否。「うッとしいから些し……」―化轉する下女を泣き聲で思ひ入れ深く叱りつけたばかり、搔い卷きと被つて――跡は搔い卷きが小ぶるひをするのみでした。

通信問答

心得第一　通信問答は無手數の事○第二　御問ひ合へせの事が答へを載せる雜誌の七號以前（この號に限り）にあればそれには委しく答へず、只其所在をのみいひます○特に普通に有益と認めた事實には廣くその答案を募ります○御問ひ合はせの文字並びに文章は成るたけ明瞭に書くべき事

かをる樣へ　府下で今屈指の日本畫工は、淺草榮久町の松本楓湖、向島小梅の寺永濯（姓小林）、兩國藥研堀の渡邊省亭、麴町區富士見町の竹内桂舟、淺草小島町の川邊御楯、其他浮世畫では月岡芳年、尾形月耕などの諸氏です。洋畫には五姓田氏もあります。和洋共外にも許多有りますが、略しました。

KS女史さまへ　(一)色を白くするには硫石も効が有ります。事に因つて其内其法をいらつめへ載せるかもしれません。(二)白色法に沃度ポツタースを用ゐる法は知りません。

木島桐子樣へ　枯れた竹に模樣を附けるには成るたけ粘り氣の有る粘土で模樣をこしらへて竹にかぶせ、火に炙つて手際よく焦がすと、粘土の付いた處だけ白く殘つて模樣が現はれます。此上硝酸でも塗れば更に色が付きます。生竹へは混雜した模樣は付きません、點か斑ぐらゐな物です。生竹へ灸をすゑ、艾藥に石灰を解いて其上から周圍に塗り、竹の皮で巻いて置き、一ケ月程後剝いて見れば灸の痕が白く殘つて居るといふ事です。

奈古農婦樣へ　小兒の急癇療法はいらつめ第十三號に有りました。長文ゆゑ轉載しません。

牧野とき子樣へ　(一)硝子板へ檜杉などの脂のついたのは小刀で削つて落ちません。(二)カラやカフスの洗濯法は左の通りです。即ち洗濯ソーダ五匁を水一升に溶かし、それへ洗はうと思ふカラなりカフスなり漬け、十四時間其儘に置き、偖それでよく揉み洗ひ（是で汚れは落ちます）、乾いた布で押して水氣を去り、別の盥に入れ手の入れられる位の湯を掛け、上等の洗濯石鹼で更に洗ひ（皺を付けぬやうに）、汚れの全く無いのを見て、前位の溫度の湯で石鹼をよく洗ひ落とし、更に冷水へ入れてふりだし、又乾いた布で押して水氣を絞り、奇麗な繩に掛けて日に乾し、それから糊を付けるのです。糊製法は米の粉を普通の姫糊を拵るとほり鍋で拵るのです。此糊が薄ければ直に用ゐて付けても宜しいですが、濃過ぎたなら湯で好い工合に解き、其中へカラかカフスを入れ、すこし置いて充分に糊を含ませ、それから取り上げ、絞つて繩に掛けて乾し、乾上がつた處で茶碗でこするか火熨斗を掛けて艶を出させるのです。

朝野さまへ　(一)水浴は腦病患者に宜しいです。(二)水浴に關する一切の委細はいらつめ第七號に清潔法として出て居ました。長文ゆゑ轉載しません。

田中樣へ　(一)鈴木弘恭氏の文法口授（女學雜誌社版）なども和文獨習には宜しいです。(二)履物のため延びぬ爪を延ばす法は知りません。

渡邊佳世子樣へ　佛蘭西白墨が有りませんなら、仕方有りません、些し劣りますが和製白墨でも宜しいです。

みどり樣へ　(一)鵲の渡せる橋とは仰せの通り鵲といふ鳥が羽をひろげて橋とするの說が正しいです。(二)此頃出た書物音樂理論百ヶ條は可なりな物ですが、すべて音樂などは獨學ではいけぬ物です。(三)酒精で油を溶めたのが稍です。

琴水女史へ　(一)露店で賣るハンドコロンで御注文次第全國至る處へ直接に差し立てます。(二)ハンドコロンは勝手次第に塗れば宜しいです。身體中どこでも構ひません。些し粘りますから其用意を爲さい。

つる子樣へ　カフスの蠟引き糊製法は常のカフスに引く糊に晒しの白蠟（最上の眞白なのを撰ぶ）を些し入れ、火に鍋を掛け、掻きまはして居る内に蠟は解けます。是だと引いてカフスが光ります。カラに用ても一切宜しいです。

中田さと子樣へ　ソバカスを去る法に至極のが出來ました。其法硼砂二ドラクマ、ハンドコロン一オンス、軟水パイント、この三種をまぜて一日に三度づゝ顏へ塗るのです。眞法です。

花川操さまへ　身體は壯健に思はれても自然に髮が脫けるのは何か子細の有る事です。然るべき醫者に是は見て御貰ひなさるが宜しいです。

薔花女史へ　(一)脚氣に牛乳や玉子は大して毒でも有りません。(二)味噌は滋養になります。醬油は些し人を疲持ちにします漬物の中でも味噌漬、奈良漬などは大して身體に毒にもなりませんが、其他の澤庵、菜漬などは餘りよい方では無いです。(三)成美社では詩も添削します。(四)好い英辭の名は二十六號の通信欄内にあります。

知遠女樣へ　(一)近頃の婦人書物は杉吾一氏の家政讀本、小池氏の家庭教育、子供のそだて方（以上金港堂）、姫かゞみ（女學雜誌社）、看護婦教程（島村利助）、はゝのつとめ（丸善）杯です。大抵御申し越しの程度です。(二)面皰の膿むのに木炭粉を塗るのも仰せの通り宜しいです。其外、リスリンを塗つても辰砂蜜をつけても李の肉（生の李が無ければ干したのでも宜し）を付けても宜しいです。(三)ソコヒ療法は知りません。(四)一錢や二錢の齒磨は迚も齒のためにある物では無く害が有るのみです。(五)鐵漿は齒に大毒です。熱してつければ大して早くは剝げません。(六)好い油ならば洗ひ髮にも些はつけて宜しいです。

疑問（イ）最上適當の婦人枕作り方…知遠女（ロ）胡瓜を背漬けにする法…知識女（ハ）黑子を拔いた跡のアバタを去る法…關口某女（ニ）最上饅頭製法…田中醜婦（ホ）一般に利くワキガ治療法…ちとせ（ヘ）油足を治す法…司馬葯子○右の法を確答の方にはいらつめ一部進上

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY